言語知識とメタ言語知識との関係
－　音韻、統語面を中心に　－

○伊藤友彦（いとう　ともひこ）
東京学芸大学教育学部

（要旨）　言語に対する自覚的知識であるメタ言語知識の発達に関する研究は言語発達や言語障害の研究上、重要な意義をもつと思われる。今回は筆者がこれまで行ってきた音韻、統語面を中心としたメタ言語知識の発達に関する一連の研究を紹介し、最後に、その結果をふまえて、無意識の知識である言語知識の発達と、意識的・自覚的知識であるメタ言語知識の発達との関係について考察する。

Key words: 言語知識，メタ言語知識，発達，音韻，統語

1. はじめに

メタ言語知識（metalinguistic awareness）はメタ言語意識と訳されることもあるが、「話すこと」や「話し方」を含めた、言語に対する自覚的知識をいう。幼児期の吃音や構音障害の原因を究明したり、指導法を検討する場合、さらには読みの発達や障害を理解するための基礎的研究として、子供たちが発話のどのような側面をどの程度自覚できるのかを把握しておく必要があると思われる。そこで、筆者は音韻、統語面を中心に、メタ言語知識の発達について一連の検討を行ってきた。

2. メタ言語知識の発達

2.1 音韻に対するメタ言語知識の発達

伊藤（1995a）は構音、発話の流暢性に対するメタ言語知識の発達を検討した。対象児は3歳から6歳までの健常児 80 名であった。対象児の前に刺激語の絵（スイカ）が提示され、刺激語が正常な言い方、正常な構音からの逸脱を含む言い方（「構音の誤り」）、語頭音節のくり返しを含む言い方（「音節のくり返し」）の3種類、実験者によって口頭で提示された。対象児は刺激語をよく聞いて、おかしかったらおかしいというように教示された。その結果、以下の点が明らかになった。1）「構音の誤り」に対してメタ言語知識を持つ者は、3歳、4歳ではそれぞれ、20.0％、25.0％にすぎなかったが、5歳では 75.0％、6 歳では 100％であった。2）「音節のくり返し」に対してメタ言語知識を持つ者は、3歳、4歳ではそれぞれ、15.0％、30.0％と低かったが、5歳では 80.0％、6 歳では 100％であった。

この研究の結果、流暢性に対するメタ言語知識を持つ者は3歳ではわずかに 15.0％であり、この 15.0％の子どもも理由を言語化しうるほどの確かなメタ言語知識を持っていないことがわかった。このことから、3歳前後で発生する吃音については話すことや話し方に対する自覚的知識が中核的な要因である可能性は低いと推察される。

一方、構音に対するメタ言語知識を持つ者も3～4歳では少数であった。また、正常構音との違いを言語化しうる者は3歳では皆無であり、4歳でもほとんど存在しなかっことから、3～4歳までの構音の発達は構音に対する自覚的な知識の獲得によるものではない可能性が示唆された。

一方、伊藤（1995b）はアクセントに対するメタ言語知識ついても同様の検討を行った。その結果、構音、流暢性に対するメタ言語知識と類似した結果を得た。また、アクセントに対するメタ言語知識は構音に対するメタ言語知識と高い相関をもつことが明らかになった。この結果から、発話の分節的特徴に対するメタ言語知識の発達と、韻律的特徴に対するメタ言語知識の発達との間に密接な関係が存在することが示唆された。

2.2 統語に対するメタ言語知識の発達

伊藤・川上（2003）は、「の」の過剰生成（例：赤いの花）に対する反応をてがかりとして、統語面に対するメタ言語知識の発達を検討した。対象児は3歳から6歳の健常幼児 77 名であった。「の」の過剰生成を含む刺激語を口頭で提示し、おかしかったらおかしいと言うように教示した。その結果、以下の点が明らかになった。1）聴覚的に提示された「の」の過剰生成を自覚的に捉えることができる幼児の割合は3歳、4歳ではそれぞれ 11.8％、30.0％にすぎなかったが、5歳では 75.0％となり、6歳では 95.0％に達した。また、2）理由を適切に言語化できる幼児の割合は、3歳では 5.9％、4歳でも 15.0％であったが、5歳では 60.0％となり、6歳では 80.0％に達した。この結果、統語に対するメタ言語知識は音韻に対するメタ言語知識と同様、

5～6歳で著しく発達することが示唆された。

3. メタ言語知識の発達と読み

3.1 特殊拍に対するメタ言語知識と読み

伊藤・辰巳（1997）は 1）幼児が聴覚的に提示された特殊拍省略語をいつごろから自覚できるか、2）聴覚的に提示された特殊拍省略語の自覚の発達は、発話における特殊拍の自覚的分節化の発達、および文字の読みの獲得とどのように関係するか、を検討した。対象児は3歳から6歳の幼児 80 名であった。この研究の結果、以下の点が明らかになった。1）聴覚提示された特殊拍省略語を自覚的に捉えることができる幼児は3歳では 10.0％～15.0％、4歳では 30.0～35.0％であったが、5歳では 60.0～70.0％、6歳では 85.0～95.0％に達した。2）特殊拍を発話において自覚的に分節化できる幼児は、促音を除き、4歳で100％に達した。3）発話において特殊拍を自覚的に分節化できない幼児は文字の読みもできない傾向があった。

聴覚提示された特殊拍省略語を自覚的に捉える能力の発達の結果は、同じ方法で検討した構音、流暢性、アクセントに対するメタ言語知識の発達の特徴（伊藤, 1995a, 1995b）とほぼ一致していた。このことから、音韻に対するメタ言語知識は、分節的特徴についても韻律的特徴についても同様の発達の様相を示すことが示唆される。

また、聴覚提示された特殊拍省略語に対する自覚の発達に比して、特殊拍の発話における自覚的分節化の発達が著しく早かった理由については、発話の自覚的分節化の方が要求される自覚の強さないしレベルが低かったことによると考えられる。

一方、発話において特殊拍を自覚的に分節化できない幼児は文字の読みもできない傾向があったという結果は、天野（1986）が主張したように、モーラに対するメタ言語知識が個々の仮名文字が読めるようになるための必要条件であることを示唆している。

3.2 モーラへの自覚的分節化と読み

伊藤・香川（2001）は文字獲得前の幼児の韻律単位の発達を、語を自覚的に分節化させる方法を用いて検討した。対象児は3～6歳の健常幼児 80 名（各年齢 20 名）であった。刺激語は3音節6モーラ語であった。音読課題の結果、36 名（3歳児 20 名、4歳児 13 名、5歳児3名）が文字獲得前の段階であった。これらの文字獲得前の幼児から以下の知見を得た。1）モーラへの分節化が可能な幼児の割合は加齢とともに増加した。しかし、2）3語すべてをモーラへ分節化できた幼児は存在しなかった。3）モーラと音節の両方に分節化できる幼児の割合がもっとも高かった。4）モーラへの分節化が可能な幼児よりも音節への分節化が可能な幼児の割合の方が高い傾向があった。これらの結果から、モーラは文字獲得前に加齢とともに発達するが、文字を獲得した幼児ほど確立された単位となっていないこと、音節とモーラの両方が文字獲得前の幼児に心理的に実在していることが示唆された。

4. 言語知識とメタ言語知識

構音、流暢性、アクセント、特殊拍に対するメタ言語知識の発達はよく似ていたこと、構音とアクセントのメタ言語知識に高い相関がみられたこと、さらに、音韻と統語に対するメタ言語知識の発達が類似していたことから、メタ言語知識の発達は、言語知識の発達とは異なり、音韻や統語といった言語知識の各領域を超えた能力によってもたらされる現象である可能性が示唆される。ただし、音韻知識と統語知識は共に演算（computation）にかかわる知識としての共通点をもつことが指摘されているため、この考察の妥当性は今後、語の意味や語用論に関するメタ言語知識の発達などとの関係を検討することによって検証する必要があろう。

一方、仮名文字の読みが音韻に対するメタ言語知識の発達と密接に関係したのは、文字言語の獲得と音声言語の獲得との性質の違いによると思われる。母語の場合、音声言語は無意識のうちに獲得されるが、文字言語の獲得は意識的、自覚的学習による。意識的、自覚的能力であるメタ言語知識の発達が文字言語の獲得と対応するのはこのためであると思われる。

＜文献＞

天野　清（1986）子供のかな文字の習得過程. 秋山書店.

伊藤友彦（1995a）構音, 流暢性に対するメタ言語知識の発達. 音声言語医学, 36, 235-241.

伊藤友彦（1995b）構音, アクセントに対するメタ言語知識の発達. 音声言語医学, 76-77.

伊藤友彦・辰巳　格（1997）特殊拍に対するメタ言語知識の発達. 音声言語医学, 38, 196-203.

伊藤友彦・香川　彩（2001）文字獲得前の幼児における韻律単位の発達:モーラと音節との関係. 音声言語医学, 42, 235-241.

伊藤友彦・川上真代（2003）統語に対するメタ言語知識の発達:「の」の過剰生成に対する反応を手掛かりとして. 音声言語医学, 44, 9-14.